



地域生活を支える
社会福祉法人

— 第164回 —

地域住民とともに進める プレゼント・バンクの活動



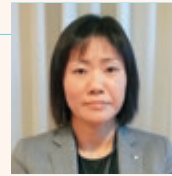
静清会では、2か所の学老所を中心に「プレゼント・バンク」を展開している。



隣人祭で披露される、近隣の中高生たちによる演奏。

静岡県静岡市にある静清会は、プレゼント・バンクの活動を通して地域と住民の方がたに、多彩な貢献活動を展開する。

静 清 会
[静岡県静岡市清水区]
の試み



理事長
池谷 百合江

【法人の概要】

- 法人名
社会福祉法人 静清会
- 本部住所
〒424-0902
静岡県静岡市清水区折戸
5丁目18-36
- 事業内容
特別養護老人ホーム 短期入所生活介護
通所介護（一般型・認知症対応型） 訪問介護
居宅介護支援事業
学老所（コミュニティスペース） わっぱ、nico



社会福祉法人
静清会の沿革
家で過ごしているように

社会福祉法人静清会は、平成10年3月に設立された。

創設のきっかけは、初代理事長望月佐門氏の母、登女氏が残した言葉であったという。

「最近の世の中は、畳の上で最期を迎えることができなくなってきた。病院のベッドの上ではなく、家庭的な場所で最期を看取られるような環境を整えてほしい」

その一言をきっかけに、当時、農家を営んでいた望月佐門氏は、私財を投じてこの施設を始めることとなった。

家庭的な場所を！との思いは、特養施設内の居室にも表れている。〇丁目〇番地。すべて居室はこつした住所の形で呼ばれ、「町内」には地域交流所も設けられている。

静清会の基本理念
福祉の村をつくること

静清会の法人理念は次のとおり。

「100%満足と納得をしていただくサービスを提供します。

地域社会に根ざし、幅広く福祉の輪を広げ、御利用者様の生活の向上を目指します。

お年寄りが心豊かな生きがいの持てる生活を送っていただける手助けをします。」

この理念の前には法人の「夢」として、

「畑を耕しながら

お年寄りが活き活き暮らせる

『福祉の村』をつくること」

という言葉も掲げられている。

創設のきっかけとなった初代理事長の母、登女氏の言葉、精神が

継承された言葉でもある。

また、静清会では128名の職員が働いているが、その中心となつて活躍している女性職員が働く環境について工夫を凝らし、「働き方バージョンアップ」に取り組んでいる。これまでも、夏休み中の親子での出勤や服装規定の自由化、スタッフ休憩室のリノベーション、託児所の開設などに取り組んだことで、女性職員の働きやすい職場づくりが認められ、今年度、「静岡市女性の活躍応援事業所」として大

賞を受賞している。



静清会 外観

1

地域で支え合いの連鎖を生む プレゼント・バンク



プレゼント・バンクは、これまで日本人が行ってきた文化継承の考え方を地域社会に取り入れ、個人や団体のもっているモノ・技術・知識・情報・経験といった、有効な社会資源である「人生財

産」をバンク（貯蓄）し、地域の方がたへプレゼントすることで、支え合いの連鎖が生まれることをめざす静清会の取り組みだ。

「人生財産」が私たち個人や組織、地域、社会生活を豊かにする

という信念のもと、静

清会がファシリテーターとなり、地域社会

で活動したいという人たちのさまざまな取り組みを支援するとともに、「人生財産」という価値観を社会に広げたいという考えがある。この活動をとおし

て、地域の方がたそれぞれが個別に立ち向かっている困難な課題や、単体の組織や団体では解決できない社会問題に対して、互いの人生財産を提供し、向

き合い、相互の協力のもと実践し、解決できる地域をつくることをめざしている。

プレゼント・バンクの具体的な

活動は、居場所づくり、料理をおした交流活動、世代間交流など、多岐にわたるプロジェクトが進められているが、3年前に、この取り組みを始めるきっかけとなったことがある。

静清会を定年退職した一人の社

会福祉士が、「自分の活動を地元

に還元したい」という思いから、地域住民のための居場所として学

老所「わっぱ」を静清会の近隣に立ち上げた。「わっぱ」では開設以降、地元の独居高齢者の方がたを対象とした食事会や、子どもたちの英会話教室などを開催し、地元の方がたが自由に出入りできる

多世代交流の場となっていた。

東日本大震災以降、地域住民による継続的な助け合いの大切さ、法人の地域への貢献の重要性を強く意識していた静清会ではこの活動を支援していたが、平成26年、「わっぱ」を設立した元職員によ



学老所「わっぱ」は多世代交流の場となっている。

る事業の継続が困難となり、静清

会に相談があった。静清会がその

活動を引き継いだことから、学老

所「わっぱ」を中心とした取り組み

みとしてプレゼント・バンクが展開されるとともに、さらに新たな学老所「nico」を施設内に設置することとなった。プレゼント・バンクの各活動はこの2か所の学老所を中心として、現在、さまざまなプロジェクトが進められている。



2か所目の学老所として施設内につくられた「nico」の室内。

2

栄養士の財産を、
楽しい食事に



食事をしながら楽しい時間を過ごすことのできる「ポポットキッチン」の様子。

プレゼント・バンクでは「食」をテーマにした活動が盛んだ。

施設の管理栄養士を務める三人のスタッフが中心となって、学老所「わっぱ」で月2回開催されるポポットキッチンは、「もっと楽しく食事の時間を過ごしてほしい」

「誰かと食卓を囲む機会をつくり、人と人とを結ぶコミュニケーションの場になってもらいたい」という思いから始まった食の活動だ。地域の高齢者が毎回10名ほど参加し、旬の素材を使ってつくられる食事を楽しみながら、今日のメニューに関する話題や、手軽で健康によい食事のつくり方など、栄養士ならではの話題で毎回楽しい時間を過ごしている。ポポットキッチンには、施設利用者の参加も可能で、外食気分を食事を楽しみながら、ご近所の方がたとの交流を楽しむ風景も見られるという。

また、このポポットキッチンでの食を通じた交流は、別の活動に発展している。ここでの会話、情報交換では自然と高齢者の方がたの体調の話や病気の話などをされることが多い。さまざまな健康課題をもっている方がたに、栄養士として役に立てることはないか。

そんな思いで生まれたのが、セカンドレシピという活動だ。

好きなものを好きなだけ食べる嗜好重視の食事をファーストレシピと呼ぶ一方で、身体を気遣い、健康を重視した食事を「セカンドレシピ」と名づけたものだ。ポポットキッチンに参加した高齢者の方を学老所の厨房に招き、その方々の体調や健康状態に合わせたレシピを、栄養士と一緒に「ご本人が調理をする。調理したレシピには、素材がどこに行けば購入できるのか、というメモも付けられているので、食材選びの楽しみや、料理をつくる楽しさを感じていただきながら、自分の健康に合った食事を自らがつくれるようになる。

このほかにも、子どもを対象にした「食」の活動も盛んに行われている。毎月1度開催される「おうちDeei」は、子どもたちが参加するクッキング教室だ。学老

所に子どもたちも気軽に立ち寄ってもらえるよう考えられた活動の一つだ。その時々々の季節感や旬を大切にした手料理から、カフェや飲食店・レストランなどで出されるような、あこがれのメニューまで、子どもたちが栄養士と協力して料理をつくる。この会には、講師役として地域住民の方が参加され、自らの得意料理を子どもたちにも伝授することもあるという。

試食会には地域の高齢者の方も参加し、食をとおした異世代交流の場にもなっている。



栄養士と一緒に調理をする「セカンドレシピ」。

3

高齢者の経験財産を、 地域の子どもたちに



夏休みは宿題もってnicoへ行くこう！と名づけられた活動が、平成28年の夏休みから実施されている。

施設内にある学老所「nico」に、地域の子どもたちが夏休みの宿題を持ち寄って、自由に時間を



夏休みには宿題を持ち寄って大勢の子どもたちが、特養の施設内にある「nico」に集まってくる。

過ごしてもらおうというもの。今年度、職員は昨年の実績から「5人ぐらい参加してくれたら」と考えていたとのこと。しかし、夏休みが始まると、小中学生16名の子どもたちが、平日のほぼ毎日参加し、延べ206名の子どもたちが訪れる結果となった。

人数が増加した大きな理由は、昼食の提供を始めたことだ。子ども食堂の存在が注目されている昨今、当施設でもぜひ取り入れてみたい、との思いで試してみたところ、このような結果につながった。子どもたちが学老所で過ごす時間、職員は同室内で事務仕事をしているが、とくに子どもたちの勉強の手伝いは行わず、あくまで子どもたちの自主性に任せている。その結果、集まった子どもたちのなかで、自然に年上の子どもが年下の子どもの勉強を教える姿が見られるようになったという。ま

た、学老所に毎日子どもが訪れることで、施設内に新しい風景も見られるようになった。その様子を、特別養護老人ホーム羽衣の園副施設長の市川晃さんは次のように語る。

「子どもたちは、お昼ご飯を食べた後など、施設を探検したい！と言い出して、一緒に見て回る機会が何度もありました。見て回るうちに利用者さんと一緒にゲームをしたり、いろんな話をしたり、自然に交流が始まりました。利用者さんの大きな楽しみになっているのはもちろんですが、子どもたちにとっても貴重な社会勉強の場になっていると思います」

また、静清会ではリビングライブラリーというユニークな活動も実施されている。これは、日常生活であまり触れることのない知識について、本の代わりに人が伝えていくというもの。もともとデンマークで発祥した活動だ。

高齢者とかかわる機会が少ない



介護現場で働く職員の生の声を介護未経験の若者に伝えるリビングライブラリー活動にも取り組んでいる。

若者を学老所に迎え、施設の職員がリビングライブラリーの役割で、さまざまな知識を伝える。

介護現場で働く職員が、毎日どのように高齢者の方がたと接しているか。どんな時に喜びを感じるか。一人ひとりの職員それぞれの視点で、生の声を伝えることで、高齢者の姿を身近に感じてもらうとともに、介護という特別に見えるてしまう世界で働く人が、自分たちと変わらない感性で働いていることを知ってもらう目的だ。

4

ひとりの人生財産を、地域の共有財産に



年一回開催される「隣人祭」は地域の方がたと交流を深める貴重な場となっている。

年に一度、学老所「わっぱ」で開催される隣人祭は、地域の子どもから高齢者までが気軽に集まって、食事や飲み物を楽しみイベントだ。隣人祭は、そもそもパリの小さなアパートでおきた高齢者の孤独

死をきっかけに、住民たちが建物の中庭に集まり、交流のための食事会を行ったことを起源とし、現在ではヨーロッパ29か国800万人が参加する市民運動となり、近年は日本でも開催されるようになっていく。

実は、静清会がある地域でも居高齢者の孤独死が発生し、その反省もあって、この地域で開催されることとなった経緯がある。

近隣住民の方50〜60名が来場するこの会では、毎年恒例のセイロンカレーをはじめとしたこだわりの料理が1000円程度の安価で提供され、会場の各所では参加者が持ち寄ったワインを片手にバケットを食べるシーンも見られるという。

市川晃さんは、この会の様子や狙いを次のように語る。

「社会福祉法人や福祉施設が取り組む祭は、真面目過ぎてしまうところがあると思います。こうし

た活動をとおして、地域に住む高齢者の存在や笑顔の大切さに気づいていない人にメッセージを伝えていくには、一般の人たちにも興味をもっていただけのような、デザインやネーミングが必要だと思います。この地域の集まりに、パリの発祥の隣人祭と名づけたのも、このような狙いがあります。」

静清会では、こうしたイベントをとおした近隣住民との交流のほか、地域の学生との交流も盛んに行われている。

近隣の小中高の児童、生徒の皆さんを積極的に受け入れるインターシップやボランティア活動もそのひとつ。お年寄りとの交流をとおして、文化や価値観を学んでいたことを目的としたもので、学校側に出かけていく活動も含め、年間1,000人近い学生との交流が実現しているという。

取材当日も、静岡県立清水南高校の生徒の皆さんが施設を訪問し、学老所「nico」

0」で施設利用者の方がたと交流会が開かれ、素晴らしい笑顔で話し込まれている利用者の姿が会場に見られた。

交流会の後は、生徒たちによる歌と演奏のプレゼント。広いホールには利用者の方がたと集まり、その前で懐かしい唱歌が披露され、多くのお年寄りが声を出して合唱を楽しんでいた。



地元の高校生が「nico」を訪れ、利用者の方がたと交流する様子。